

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2012年4月5日放送

「第13回日本褥瘡学会① 会長講演から 褥瘡への取り組み」

九州大学大学院 皮膚科

教授 古江 増隆

はじめに

第13回日本褥瘡学会総会学術集会は去る平成23年8月26日27日の両日、福岡市の福岡国際会議場を核とする隣接する3会場で開催されました。期間中、夕立はあったものの天候には恵まれ、残暑厳しい中、全国から6016名の参加者に来場していただき盛会でありました。学会準備中の3月11日に東日本大震災が発生し、学会の開催自体も危ぶまれましたが、多方面からのご支援を得て、開催にこぎつけることができました。この場をお借りして、御礼申し上げます。危惧された演題取り消しや、参加者の減少などもほとんどなく、例年同様のご参加をいただきました。

本会は、九州大学病院の中畑高子看護部長に副会長をお願いし、二人三脚で準備にとりかかりました。「褥瘡、もっと身近に」を大会スローガンにかかげ、この学会の特徴である看護領域の諸分野をプログラムと運営に存分に取り入れたかったからです。会長講演では、九州大学病院が取り組んできた褥瘡対策について、10年間の実践、工夫、成果を発表し、チーム医療の重要性を強調しました。3次医療という特殊性から、九州大学病院では手術中あるいは手術後の褥瘡の発生が懸案事項です。我々はテガダームなどのフィルムを荷圧部位に貼付すると、貼付しない場合に比べ褥瘡の発生が有意に低下することを見出しました。

大学病院では毎年多くの新人ナースが入ってきます。医師だけでなく看護師も、医療



写真1 第13回日本褥瘡学会総会学術集会は平成23年8月26日、27日の両日、福岡市の福岡国際会議場、福岡サンパレスホテル(写真)、国際センターの3会場で開催されました。

教育の観点から、頻繁に職務の移動があります。チーム医療の中で褥瘡への取り組みを考えた場合に、それに特化した教育がとても重要です。そこで一定の講義・実技をマスターした看護師を褥瘡院内認定看護師として認定する制度を設けました。これによって褥瘡に詳しい看護師の数が増え、褥瘡を発生させないという意思が醸成されるようになりました。さらに褥瘡院内認定看護師が院内研修のファシリテーターとして活躍してくれるようになり、いわゆる良い環境がひろがったと思います。九州



写真2 古江増隆会長と中畑高子副会長の開会宣言。

大学病院の褥瘡発生率はさまざまな取り組みによってもともと低く抑えられていましたが、褥瘡院内認定看護師制度が開始される前の発生率は 0.52%でしたが、開始後は 0.38%に有意に低下いたしました。

さらに褥瘡発生率を低下させるために、体圧分散寝具や器具の見直しと充実を進めました。九州大学病院の病床数は 1,275 床、のべ入院患者数は年間 413,630 名にもなります。体圧分散寝具・器具の中には劣化したものも多いため、劣化した寝具や器具の数を洗い出し、交換を進めました。体圧分散寝具・器具の交換・充実をはかった前後の褥瘡発生率は、0.38%から 0.4%であり、残念ながら褥瘡発生率のこれ以上の低下は認められませんでした。長時間手術も多く、ステロイド大量内服患者、抗癌剤投与患者など重症の患者が多い九州大学病院の褥瘡発生率は 0.3 から 0.4%が最低限界なのかもしれません。そこで褥瘡の治癒率を比較してみました。体圧分散寝具・器具の交換・充実をはかる前の褥瘡治癒率は 43.1%でしたが、体圧分散寝具・器具の交換・充実をはかった後では 53%に有意に増加しておりました。われわれの努力の積み重ねが報われたような気がして、とてもうれしく感じた次第です。褥瘡への取り組みは継続することがとても大事であると、本当に思いました。

本会では、日本看護協会 看護研修学校 佐藤先生ならびに溝上先生にご提案を頂き、「緊急シンポジウム：災害時の褥瘡対策について考えるー東日本大震災の経験からー」を実施しました。被災大学でもある東北大学形成外科の館先生と溝上先生の司会で、岩手医科大学千葉先生、淑徳大学田中先生、佐藤先生、創傷被覆材部会の内藤先生から災害時の現状、日本褥瘡学会としての支援など興味深いお話を伺いました。震災後、多くの高齢者の方が避難所の硬い床の上での生活を余儀なくされ、褥瘡がかなり発生したようです。また在宅医療も中断されてしまったため、在宅の寝たきり高齢者の褥瘡もかな

り増悪したようです。今後は災害と褥瘡予防も大きなテーマの一つであると実感いたしました。

学会における新しい試み

本会ではいくつか新しい企画も立ち上げました。様々な教育的企画を盛り込むため、例年初日午後に行われていた総会を第1日の会長講演後に行いました。しかも開会を8時15分と早めたこともあり、それ以降のプログラムをスムーズに運営することができました。また毎年好評であるWOCナースによる実践講座を、2日間にわたり開催しました。これまでの褥瘡学会での実践講座は、数百名の会場が満員になり、熱心な参加者が会場外モニターを見ながら聴講する状態が続いていたため、今回は3000名収容の第2会場を当て、2日間同じ内容で講演していただきました。講演は、手元の処置や作業をビデオ撮影し、大画面へ映写するという方法で行い、また講演内容もとても実践的なお話をしていただきました。初日はほぼ満員、2日目も会場の7割程度の参加者に来ていただき、大好評でした。

同様に、車いす実践講座、介護のための基本講座、キネステティックなど実践講座はすべて好評で、満員の聴衆で埋め尽くされました。各講演者の先生方には、ご多忙の中、事前のリハーサルなど周到的準備をしていただき、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

そのほか教育講演では、「ポジショニング」、「現場に即した失禁ケア」、「軟膏正しく塗れますか?」、「褥瘡チームが知っておくべき外用療法の極意」などが満員の聴衆を集めておりました。特に第3、4会場は常に満員、立ち見の状態、事務局としてはもう少し広い会場の必要性を痛感し、参加者の皆様にご迷惑をおかけしたとをお詫び致します。

今回は震災の影響をよそに、474題におよぶ多数の一般演題、ポスター演題を頂戴しました。口演希望が多かったものの、十分な口演・討論時間確保の目的で、一部の演題をポスターへ変更させていただきました。一般演題会場、ポスター討論では熱気にあふれた質疑応答が続き、皆さん有意義な時間を過ごされたものと思います。

栄養関連では2日目午後、美濃良夫先生、田中芳明先生司会のワークショップ6「栄養」が開催されました。足立香代子先生は「栄養障害にいたるピットホー



写真3 一部会場では立ち見の聴衆も多数あり、盛況でありました。

ル」と題して、栄養状態のこまめな再評価が重要であることを強調され、古賀秀樹先生は「適切な栄養管理を行ったはずなのに」と題して、ご専門の消化器疾患患者における栄養管理、まれな微量元素欠乏症について講演されました。

例年どおり、ランチョンセミナーはすべて満員で、多数のキャンセル待ちの列が生じました。栄養関連では「こんなにも多い亜鉛欠乏症」「栄養管理による褥瘡対策」が開催され、どちらも立ち見の聴衆が多数でるほど盛況でありました。

おわりに

褥瘡という疾患は、奥の深い疾患です。どの診療科にも関連いたしますし、チーム医療の実践が不可欠な疾患です。褥瘡を追求していきますと、一つの診療科の枠を飛び越えて、医療や社会の仕組みをいやが応でも考えさせられます。自分自身そして家族の老後についても考えさせられますし、家族愛の意味を自分に問うこととなります。褥瘡にたずさわることは、社会をみつめることであるといっても過言ではないと思います。

最後に、多数の参加者に来ていただいたことに改めて感謝申し上げますとともに、本学術集会開催へご協力頂いた関係各位に心より御礼を申し上げます。